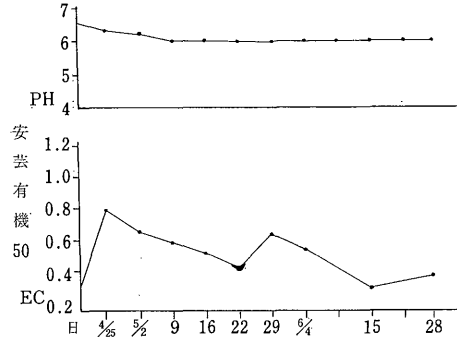
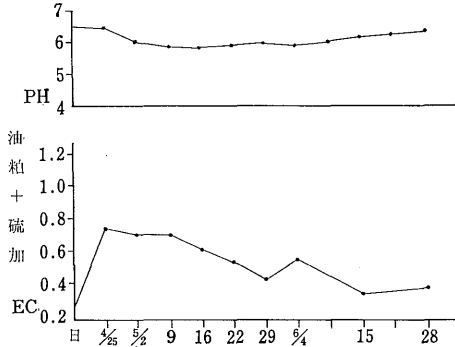


施肥前 PH 6.7 EC 0.28 チッソ施用量20kg/10 a, 元肥のみで追肥なし。

肥量の減少をはかること、多肥しても濃度障害の発生しにくい土にすることが必要であり、粗大有

モデル園で実施した試験結果



※安芸有機50は 10-8-8で、ナグネ20%, 魚カス10%, トミー有機20%, CDU17%, 硫加15%, リン安16%, FTE 2%を配合したもの

の正しさを裏付けるものとみている。

園芸相談車による土壌分析結果を基にして、個人別、圃場別の施肥設計をたてて分析結果を活用しているが、指導体制の確立している農協では、「今までより肥料が少なくて同じ出来である。今までより作りやすい」という声が聞かれるが、指導の行き届かない農協では、分析結果の配布のみに終り、分析結果が活用されることは少ない。

本県の施設園芸土壌で取り組むべき課題は、施

機物の多投と深耕がポイントであり、肥料は無機質で可能、元肥重点より追肥重点に移行することがよいと考えている。

それにも増して重要なのは、農家自身の意識の変革である。世の中すべて人によって左右され、帰結するところは当人である。施設園芸は特に個人の能力差が明確に現われる。この観点から、意欲的な若い人に大いに期待をもって園芸相談車は走っている。

回復した47年の農業総産出額

先に農林省が発表した「昭和47年の農業総産出額と生産農業所得」によると、総産出額は5兆268億円と前年に比べて9.9%増となり、米の生産調整などで45,46両年に停滞していた総産出額は回復した。

また総産出額から諸経費を除き米の生産調整奨励補助金を加えた生産農業所得は2兆9,502億円と前年より26.8%上回った。これは5年ぶりの大巾な上昇である。

総産出額や農業所得が好調になったのは、米が増産になったほか、政府買入価格が5.1%引き上げられたのが主因である。

総産出額のトップは米で、1兆7,800億円と全体の35.5%を占めている。もっとも43年の43.1%に比べると減ってはいる。このほか産出額に占める割合では、野菜が7,900億円で15.8%、果実の4,000億円で8.0%が大きい。